式　辞

明るい日ざしが春の訪れを告げ、校庭の桜も卒業の日を祝うかのように、花を咲かせ始めました。

本来であれば、この三月は、卒業までの毎日を、カウントダウンしながら思い出作りをしているはずでした。新型コロナウイルスの影響で、三月二日からの突然の休校要請に驚いたことだと思います。また、友達と勉強できないこと。遊べないことにがっかりしたことだと思います。

しかし、令和最初の卒業式。令和元年度、第七十三回熊谷市立玉井小学校卒業式が、保護者の皆様を迎え、このように挙行できますことを、心より感謝申し上げます。

卒業する七十一名の皆さん、卒業おめでとうございます。

今、私の目の前には夢の入り口に立つ七十一名の偉大な子供たちがいます。

その清々しい姿は希望にあふれています。未来という言葉がとても似あいます。

この子供たちを見守り、そして深い愛情をこめて育ててこられたご家族の皆様におかれましては感無量のことと存じます。私たち玉井小学校職員一同も今まさに巣立っていくこの瞬間の喜びとさみしさをかみしめているところです。

さて、卒業生の皆さん、皆さんにこうして話をするのも本当に最後となりました。今日の、門出にあたり、「夢」という一文字で、気持ちを伝えたいと思います。

卒業証書の後に、皆さん一人一人に色紙を渡してもらいました。名前と一言を担任の橋本先生、長谷川先生、篠崎先生に書いてもらいました。印は、森山先生が作りました。そして、夢という文字は校長先生が書きました。ご存じの通り、校長先生は左利きです。ですから、中学三年生の書初め以来、三十九年ぶりに、右手で筆を持って心を込めて書きました。美術の先生ですから、七十一色、絵の具で色を作って、一人一人違う色で書いてあります。

たった一文字の「夢」という字ですが、人それぞれ様々な夢があります。

自分だけのとっておきの夢もあれば、だれかと同じような夢もあります。大きな夢もあれば、ささやかな夢もあるでしょう。近い夢もあれば、遠い夢もあるでしょう。「それは素晴らしい」と認められる夢もあれば、人には理解されない夢もあるかもしれません。この色の数通りです。

どんな夢であっても、夢を持つことはとても大切なことです。なぜなら、夢を持つことで、人は明日や明後日のことだけでなく、もっと先の自分を想像し、自分の生き方を考えることができるからです。

もう一度色紙を見てもらっていいですか。よく見ると、最後の「夕」の部分が一画多く、「月」になっています。色も違うからわかると思います。これは、夢は決して一つではなくていい。この夢、次の夢、その次の夢で順番をつけてもいいし、こっちの夢、あっちの夢で、同時にいくつでもいい。それから校長先生のように年を重ねていくと、誰かの夢がかなうことを夢にもします。ですから、皆さんの夢がかなうことが校長先生の夢でもあります。そういう意味で一画余計に書いてあります。

そして、もう一つ、この一画、多い夢には意味があります。

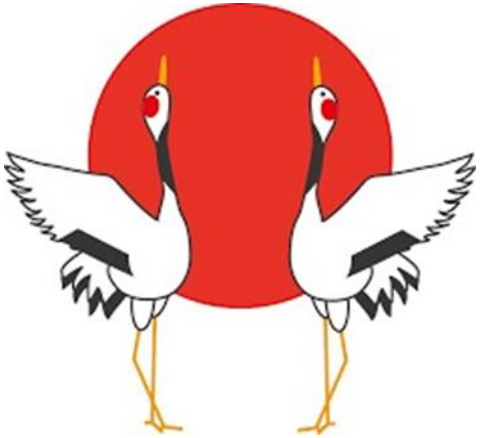
一つは自分が叶える夢の一画、そして、もう一画は、みんなで叶える夢の一画です。本校の学校教育目標は自立・貢献。自分の夢をかなえることで自立につながります。その一画。そして、みんなで叶える夢にどう貢献するか。これが貢献につながります。自立の一画、貢献の一画で自分が叶える夢、みんなで叶える夢という意味です。「みんなで見る夢は現実になる」という言葉があるように、九年前に起きた東日本大震災からの真の復興も、この夏に開催の東京オリンピック・パラリンピックも、そして、この新型コロナウイルスの一日でも早い終息で穏やかな生活が戻ることも「みんなで見る夢、みんなで叶える夢」でなくてはなりません。

吉田松陰は「夢」の大切さをこう言っています。

夢亡き者に理想なし
理想なきものに計画なし
計画なきものに実行なし
実行なきものに成功なし
ゆえに、夢なきものに成功なし

夢はあなたを見放しません。夢を見放すとすれば、それは自分です。皆さんがこれから描く「夢」に大いなる期待を込めています。

結びとなりますが、ご臨席賜りました保護者の皆様、今日まで子供たちを温かく見守っていただき本当にありがとうございました。ここにいる七十一名の子供たち一人一人の存在が、ご家族にとっては希望の光であり、地域社会にとって未来を担うたくましい力になることを願って、私の式辞とします。

令和二年三月二十四日

熊谷市立玉井小学校校長　大谷　裕紀